

免疫組織化学染色(以下、免疫染色とする)が日常の病理診断や疾患の病態解析研究ツールとして用いられるようになって久しい。その技術も確立、簡便化され、現在ほどの病理関連施設でもルーチン化作業として行えるようになっている。病理診断の領域でも、良悪性診断、癌の組織型診断、悪性度推定、転移性腫瘍の場合の原発巣推定、治療法の選択など、その用途は全臓器で多岐にわたっている。また、病態解析研究ツールとしても常に新たな抗体が開発され、これまでのHE染色標本の形態解析ではわからなかった新たな知見が得られるようになってきている。

免疫染色を最も身近な存在として活用しているのは、おそらくは病理医であろうと思われる。しかし、その病理医でさえ、免疫染色の種類や用途、評価法、評価の限界の全てに精通しているわけではなく、専門と異なる臓器に関しては、これらのことや、その臓器では標準的とされる免疫染色の種類や意義、染色の組み合わせ(免疫染色パネル)について不案内なことも少なくない。一方では、臨床の専門分野化が先鋭化している現在、特定の臓器・疾患に精通している臨床医の免疫染色に関する知識が、病理医のそれを凌駕していることもまれではない。

このように、免疫染色は臨床と病理とがクロスオーバーする技術として欠かせない存在となっている。本号は、こうした現状を背景として、病理医と

臨床医の免疫染色に関する共通認識を構築するための一助として企画された。本誌の立ち位置から、その対象は消化管腫瘍であるが、提論文では免疫組織化学総論として、検体処理・染色に当たっての注意点を概説していただいた。例えば内視鏡的摘除例の的確な病理診断のためには、摘除材料の適切な処理が必須であると同時に、免疫染色により病変の細胞学的特徴の正確な情報を得るためには、検体の的確な処理法や不適正な処理による評価法の落とし穴を熟知しておく必要がある。免疫組織化学総論に対する各論としては、臓器および腫瘍の種類別に、免疫染色を行うことの意義、各種免疫染色の基礎的事項、標準的免疫染色とその組み合わせおよび染色結果の解釈と留意点、についての系統的な解説をお願いした。

本号のそれぞれの項は、単なる教科書的な知識の体系化ではない。こうした体系化された知識を得るためだけであれば、それに答えられる教科書類は巷に溢れている。本号の記載内容には、体系化された知識に加え、各執筆者の免疫染色に関する豊富な実地経験やデータの蓄積に裏打ちされた、免疫染色の具体的運用法やpit fall(本当に知りたこと)が散りばめられている。本号を常に傍らに置かれ参照されることにより、消化管腫瘍に対する免疫染色の真価を発揮されるものと確信している。